（様式２－２）

令和5年度「校内サポートルーム（KSR）研究指定校事業」 成果報告書

１　指定校・指定校群　　（　　高松市立栗林小学校　　）

２　実施の内容

（１）　KSR 担当による体制構築

担当教員が対応することで、学級担任とともに KSR の児童の生活の様子を観察し、指導・支援につなぐことができるようにする。また、学級とのつながりをもたせるために、担当教員や学級担任が学習の状況や連絡事項を伝え働きかける。KSR の児童によってはこれを嫌がる場合もあるため、保護者や児童と話し合ったうえで、タイミングや方法を相談して行う。

（２）　安心できる部屋づくり

KSR の児童の対人関係への配慮として、KSR とする部屋（以下、相談室とする。）は普段は児童があまり通らないところを使用し、KSR 登校児童間の相性や保護者同伴の場合もあるため複数室確保する。また、KSR の児童や保護者の動線、靴箱の場所や下校の仕方を配慮する。さらに、折り紙やパズル等、KSR の児童が気軽に手に取って時間を過ごせるリラックスグッズを置き、気持ちをリフレッシュできる環境も整える。

（３）　保護者との共有

保護者参観や保護者同伴での通室などの支援を行い、保護者が子どもの気持ちを受け止めつつ支援できるようにすることで、保護者自身の安心感にもつながる。さらに、KSR の児童から相談室での過ごし方や学校生活への思いを把握し、学級担任や管理職に伝えられるようにする。

（４）　計画的・継続的支援

KSR の児童の記録を残すことで、担当教員と学級担任との連携を図るとともに、管理職も把握でき長期的な支援ができるようにする。学習は個に応じた指導を重視し、実態に応じて KSR の児童の負担にならない程度に教室とのオンライン授業を一部取り入れて学習の保障とするとともに、教室へ行くためのステップとする。テストや通知表の作成についても保護者の理解を得て、実態に応じて個別に実施する。

（５）　スクールカウンセラーや関係機関との取組

スクールカウンセラーの部屋の場所を相談室に隣接させることで、授業中でも児童がすぐに教育相談を受けることができる。また、スクールカウンセラーから KSR の児童へ声かけする機会を増やし関係性を深める。さらに関係機関との活動を通して、KSR の児童の学ぶ楽しさやできる喜びを感じる経験を増やす。

３　成果

（１）　校内サポートルームにおける児童生徒の様子

ア　環境づくり

（ア）　相談室は、どの時間帯でも入室できるようにし、戸やカーテンを全開にすることで、室内の様子を確認して入室することができ KSR の児童が安心して登校することができた。

（イ）　児童があまり通らないところやベランダから入退室できるところを相談室として設置しているため、人目を気にせず入退室することができた。

（ウ）　相談室内にソファーや円卓を置くことで KSR の児童間の関係を深めることができた。また、円卓での学習をしていくうちに不便なことが増えたため、児童用机に変更した。児童用机に変更すると教室のような雰囲気になり、学習に取り組む児童が増えた。

（エ）　保護者と離れることが不安な児童は、保護者同伴の通室の支援を行うことで学習や活動に取り組むことができた。また、相談室の雰囲気に慣れてくると、保護者との距離が少しずつとれるようになった。

イ　担当教員の意図的な支援

（ア）　毎日５校時に相談室での活動を入れることで、５校時まで学校で過ごすことができた。また、相談室での活動により、登校意欲が増し欠席率が減少した。

（イ）　学級担任と KSR の児童との架け橋になることで、担任との距離を縮めることができた。また、学級担任へ自分の思いを伝えることが難しい児童は、意思表示カードを作成し、毎日担任に提示することで気持ちを伝えることができた。さらに、学級担任との距離を縮めたことで、教室に入れなかった児童が教室内に入ったり、目を見て話をしたりすることができた。

（ウ）　KSR の児童の毎日のスケジュールは、児童自身が自己決定し、それを尊重した。計画できない時は担当教員が助言し進めた。また、学習する量や時間は計画の最初の段階で決めておくことで児童の集中力にもつながった。

（エ）　KSR の児童の思いをしっかり聞くことで児童と担当教員との関係が深まった。また、自分の思いを伝えることができなかった児童も何でも話をしてくれる関係となった。

(2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

ア　作成した作品を壁面掲示する

自己肯定感を高めるために、イラストや色塗り、折り紙等を作成し完成した作品を壁面掲示した。管理職や他の教職員が来室時に、作品を褒めるなど児童とのコミュニケーションにつなげた。

イ　ダンボール工作

友達への言葉がけや関係作り、学校で過ごす時間を増やすために、毎日５校時の授業を創作活動の場として「ダンボール工作」を設定した。ダンボール工作をすることで、児童間同士のコミュニケーションが生まれ相談し合いながら作成していた。また、管理職や他の教職員が様子を見に来てくれることで「ダンボール工作の完成を先生方に見せたい。」という気持ちが芽生え、自ら招待状を作成し、作品を披露した。

ウ　運動

体を動かしたい児童が多く体力向上のために、屋上や体育館、運動場等を利用し、徒競走やボール投げ、マット運動、とび箱等の運動を実施した。また、時間割等を考慮しながら水泳も実施した。

エ　給食

KSR 児童以外の児童との交流を深めるために、給食は担当教員や管理職が引率をして各クラスに取りに行った。毎日繰り返していくうちに、クラスの児童が声をかけたり、おぼんに給食をのせたりして児童同士の関わりが増えていった。また、相談室内では給食で最初に配膳された量が多い・苦手で食べることができないと感じたメニューについては、量を調節し、児童の食を少しずつ広げる取り組みを行った。

オ　行事等の事前指導

運動会や避難訓練、健康診断等の行事について、事前に周知を行った。実施時期や方法等を知っておくと不安軽減につながるので、行事の前日までに実施方法を再度周知しシミュレーションを行った。

カ　授業への引率やオンライン授業

勉強への遅れを不安に思っている児童や１人で教室へ行くのが難しい児童については、本人からの申し出によりクラスへの授業引率や担任と連携をしてオンライン授業を実施した。

キ　生き物、植物の飼育

道徳教育として「命の大切さ」について学ぶために、花の種を植えて育てたり、「モンシロチョウの幼虫」や「メダカ」を飼育したりした。そのことが共通体験となり、児童同士の関わりも増えた。

ク　講師による授業

相談室で育てていた「モンシロチョウの幼虫」「メダカ」について生活科担当の教員をゲストティーチャーに招き、生き物の特性を知る機会を設けた。また、KSR の児童は事前に各々で生き物に関する質問を考え授業時間に質問をしていた。また、ICT 学習では、ICT 支援員から直接助言を得られるパワーポイントの使い方等について授業を実施した。担当教員だけでなく、いろいろな教

職員と関わるよい機会となった。

ケ　スクールカウンセラーの活用

年間３６時間の配置があった。通室児童の利用７人のべ１０回、通室保護者の利用１０人のべ３１回の実績があった。一人一人がどのような課題を抱え、どう捉えているか、短期的長期的にどのようにしたいと考えているかニーズの把握が定期的に実施できた。また、保護者の心が安定するように支援していただいたり、KSR での様子を観察していただいた。さらに、KSR の児童や保護者の願いをもとに、今後の対応について、担当教員や管理職に助言をいただく等、通室児童への支援の参考にすることができた。

(3) 総括

・活動の楽しさや児童同士のつながりを登校目的とすること

不登校児童は、登校目的がないと学校へ登校はしない。登校目的を作ることで登校意欲が生まれる。活動の楽しさを知ったり、KSR の児童やクラスの児童との関わりが増えたりすると、登校意欲が高まってくると感じた。また児童同士の仲を深めるツールとしては、アニメやオンラインゲーム、SNS 等は必須であると感じた。

・KSR の児童が「自分で判断して行動できる力」を身につけること

KSR の児童ができないことを無理しようとすると悪循環が起こり、登校意欲が低下するケースがあった。自分ができることを一生懸命に取り組むことを大切にすることで、達成感や自尊感情が高まると感じた。また、担当教員は児童の自主性を尊重しながら、自尊感情を育て自分で乗り越えていく力を育む機会を作ることや児童が決めたことを焦らずに見守ることが大切だと感じた。

さらに、できないことでエネルギーを損なうより自分でできることややりたいことに取り組むことで児童のエネルギーが高まると感じた。

・保護者の理解と協力

KSR の児童が安全・安心に学校生活を送るためにも保護者の理解と協力は必要である。また、児童は学校での悩みを保護者に相談するため、保護者からの意見を十分に聞くことが大切だと感じた。

・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの活用

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携は必要であると考える。児童や保護者が相談することで、①未然防止②早期発見・早期対応③継続支援を行うことができる。